



広 報 せ き

Seki Gocoro

2022
06

No.1736



Hello!



Xin chào!



A Salaamaalekum!

巻頭
特集

関って実は…
多国籍『関』存人です

関市公式
YouTubeの
特集映像



Seki Gocoro 06

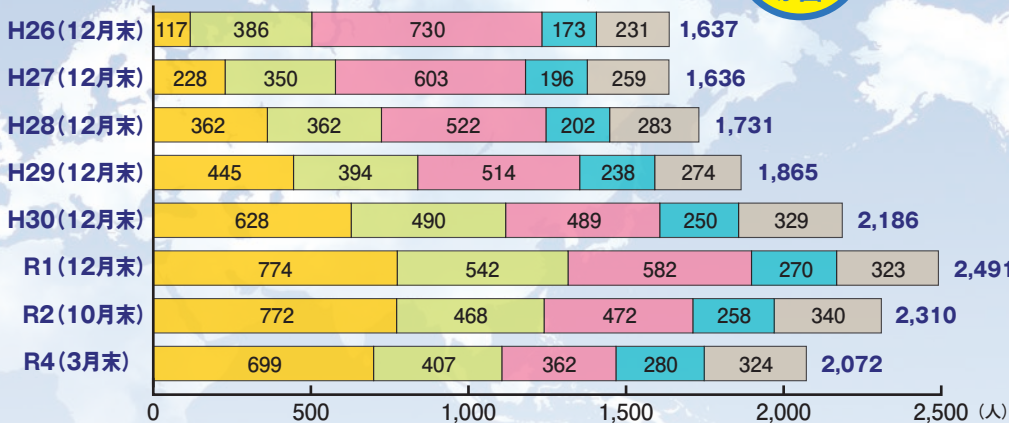
SEKI City Community Magazine

TOPICS

コロナワクチン 6P
プレミアム付商品券 16-17P
INFORMATION 20-36P
子育てカレンダー 39P

在住外国人の数と推移

計
33
か国



ベトナム
ブラジル
中国
フィリピン
その他
インドネシア
韓国・ネパール
カンボジア・タイなど

※市内、小中学校に通う外国人の数（令和4年4月1日時点）
小学校には63人、中学校には28人の外国人の子どもたちが通っています。

関市国際交流協会の活動

国際交流協会は、外国人、日本人に関わらず、関市で暮らす人々が、国際交流・多文化共生を進め、お互いを理解し親睦を深め、豊かな国際感覚を身に付けてもらうために活動しています。広報紙を発行するほか、在住外国人との交流会、姉妹都市・友好都市との交流、英語講座・外国文化紹介講座などを定期的に行っています。みなさんもぜひ活動への参加をお願いします。また、在住外国人への支援として、日本語を母語としない子どもたちへの日本語等学習支援「つばさ教室」「わかさ教室」、大人向けに、「日本語講座」を開講しています。会社や学校、近所の在住外国人の方にぜひお知らせください。



Pick up

日本語ボランティアサークル受講生募集中！ 「日本語講座」

日本語を学びたい在住外国人を対象に、読み・書き・会話を小人数のグループで教えています。

■日 時 夏5/11～7/27 19:30～（全12回）
秋9/7～11/23 19:30～（全12回）
冬1/11～3/22 19:30～（全12回）

■場 所 わかさ・プラザ 学習情報館

※講師を大募集中。講師のための研修会を随時開催しています。（詳しくは協会事務局へ） ☎22-3131（内線1351）

ともに暮らしやすい地域づくりを進めましょう

現在関市には33か国2000人を超える外国人が暮らしています。それぞれ生まれた国は異なりますが、同じ地域で同じ時を過ごす市民でもあります。今回、出身国の異なる3人の率直な思いを聞いてきました。全ての市民が一緒に関市を創っていくために、まずはお互いのことを知るところから始めていきましょう。

お互いがお互いを知り理解する場をもっと増やしていきたい



1994年の協会設立時の思いを受け継ぎ、関市の子どもたちに国際的な視点を身に付けてもらうための支援や姉妹都市との交流事業に加え、今後増えるであろう外国人労働者やその家族が、日本に馴染めるような支援をしていきたいです。特に、家族で来日する子どもたちが日本を好きになり、日本の習慣に馴染み、日本を支える人たちになってほしい、また、帰国しても関市を第二の故郷と感じてくれるようにしたい、そんなお手伝いができればと考えています。お互いがお互いを知り理解する場を少しでも増やしていく、そうすれば、人と人だから自然とお互いのことを受け入れ分かり合えるようになっていくと思っています。

関市国際交流協会会長 常川 雅通さん



協会ホームページ



協会Facebook

関市は、ブラジルのモジ・ダス・クルーゼス市と姉妹都市、中国の黄石市と友好都市提携を結んでいます。

レーティ・ズイエン

LÊ THI DUYÊN

年齢：23歳

出身：ベトナム ハイズオン市

家族：7人家族

(父、母、姉、本人、妹3人)

住所：関市小瀬

趣味：料理



Vietnam



お昼ご飯は、手作りの弁当をチームのみんなで(日本トムソン(株)工場内にて)。

小さいころに観ていた 日本のアニメが大好きだった

武芸川にある日本プロパワー(株)で、包装・梱包業務に携わっている。周りの職員からの信頼も厚く、頼りにされている感じが伝わってくる。

彼女が日本にやってきたのは3年前。小さいころから日本のアニメが大好きで、日本に対して親近感をもっていた。高校の時、友人から「卒業後に日本へ行く」と聞き、私も行きたい、と手を挙げた。そこから半年、日本語学校で猛勉強の日々を送った。晴れて来日したが、同じ国の社員たちと寮生活を

送り、職場でも同じメンバーで仕事をする毎日。仕事上は通訳もいて、日本語が話せなくてもそれほど不自由することはなかった。しかし、持ち前の向学心で積極的に日本人の社員に話しかけるなど、日本語を独学で学んだ。「まだまだ漢字を読むのは難しい」と笑うが、日本語検定では、すでに通訳ができるレベルの2級を取得している。今も1級を目指し勉強を重ねている。

直属の上司である佐藤一彦所長は「明るい性格で、みんなに声掛けするなど、チームでは中心的な存在です。技能実習生の実技試験では、重い工具を巧みに使って職人顔負けの作業を行っていたのが印象的です。何事にも積極的で仕事の覚えも早く、大変助かっています」と目を細める。

日本語の先生になりたい 漢字の読み書きが今後の課題

温暖な海沿いのまちで育ったため、山の多さも雪も初めてだったが、関市での生活にも慣れてきた。「日本は接客サービスが素晴らしい。親切だし笑顔で対応してくれる」と日本のおもてなし精神に感動した様子。休日は、友人と楽しく食事をするなど、日本での生活を満喫している。「関のうなぎは最高」と顔をほころばせ、「あとは沖縄に行きたい」と無邪気に笑う。

帰国後の夢を聞くと、すかさず「日



仲良し5人組、チームはいつも一緒。

本語の先生になりたい」と答えた。「ベトナムでは日本に興味がある人、日本に行きたい人は多いけど、まだまだ日本語を勉強できる場が少ない。日本語の先生になるために日本語検定1級の勉強をしている。もっと会話力をアップさせたい。今後の課題は漢字の読み書き」とのこと。

夢に向かって頑張ろうとするまっすぐな瞳がそこにはあった。



仕事はいつだって真剣。



お気に入りのサッカーセネガル代表“Les Lions de la Teranga”のユニフォームを着て。

ジア・セクナ

Dia Sekuna

出身：セネガル
ンブール市

家族：妻

住所：関門市平賀

趣味：サッカー、フリスビー、
ランニング



Senegal

日本に本物の侍や忍者がいなくてショックだった

大西洋に面した都市で多くの子どもたちと同じようにサッカーをして育った。もちろんセネガル代表チームの大ファンだ。
大学で地質学を専攻。その後、鉱山会社で金などの鉱物を掘り当てるチームのエンジニアとして働いていた。もともと日本に興味があり、日本の時代劇映画が好きでよく観ていた。日本の歴史、特に明治維新の新しいものを取り入れチャレンジしていく進取の精神に憧れ日本で学ば

いと思うようになった。

日本の奨学金制度を利用し岐阜大学で改めて地質学を学ぶために来日した。日本人は小さいころから英語を習っていると聞いていたので、英語さえ話せば大丈夫だと思っていたが、必要に迫られ留学センターで日本語漬けの日々を送ることに。

日本では、本物の侍、忍者が街を歩いていると思っていたが、一人もいなくてショックだった。仕方なく忍者の博物館で我慢した。

好きな日本料理は「焼きそば」「お好み焼き」セネガル料理店を開きたい

日本では文化も違うため驚きの連続だった。箸を使うこともその一つ。セネガルの母へ電話で「日本人は枝



教育委員会のAETとして、小中学校で英語を教えている。



6月25日(土)、26日(日)に、本町BASEでセネガル料理を販売。今回で8回目となる。

でご飯を食べている」と報告したくらい。しかし今では、スプーンやフォークより箸のほうが上手に使えるほどに馴染んできている。好きな日本料理は「焼きそば」「お好み焼き」。3月に帰国した際も、お土産としてたくさん持って帰り、家族で焼きそばパーティーを楽しんだ。
チャレンジ精神が旺盛な彼は、定期的に本町BASEでセネガル料理を販売している。毎回好評で、6月にも出店する予定。
コロナが収まったら妻を呼び寄せセネガル料理のお店を開きたいと思っている。「セネガルの料理はどれも本当に美味しいよ」人懐っこい笑顔でそう言われると、食べてみたいと思わせる魅力が彼にはある。

スミス・レスリー Smith Leslie

年齢：49歳

出身：カナダ ハミルトン（五大湖のほとり）

家族：4人家族（本人、妻、長女、長男）

住所：関市洞戸

趣味：アウトドア、バレーボール、

語学（研究）



Canada



地元の神社で。見晴らしのいいこの場所は散歩コースの一つ。

自分の性格は日本の文化に マッチしていると気づいた

初めて日本の地を踏んだのは、15歳の時だった。ロータリークラブの交換留学生として、富山県氷見市で1年を過ごした。そこでの体験から、自分の性格が日本の文化にマッチしていることに気づき、帰国後、本格的に日本語の勉強を始めた。もともと語学を学ぶことが好きで、フランス語はもとよりドイツ語も履修していた。

大学を卒業後、カナダで就職したが、その間も勉強を欠かさず、23年前に英会話教室の講師として再度来日した。結婚後、岐阜市に住んでいたが、同僚から洞戸

を紹介してもらい、気に入ったので住むようになった。自身は人情豊かな下町育ちだったが、ボイスカウトに入団したり、カヌーを楽しんだり、自然の中で遊ぶのが大好きだったので、自分の子どもたちも結びつきの強いコミュニティや大自然の中から学び育ってほしいと考え洞戸に根をおろした。

外国人が地域に受け入れられるのは並大抵ではないはずだ。ましてや、古くからあるコミュニティではなおさらだろう。しかし、スミスさんは自然にそれができる。根底には、日本文化ひいては洞戸の人・文化に対するリスペクト（敬意）があるからだと感じる。

言語はその国の文化の保存装置 文化を理解しないと上達しない

日本語について「日常会話までは話せるようになるけど、そこから上達するのは難しい。それは日本の歴史的な背景や文化を理解するのに時間がかかるからだと思う。言語は、その国の文化の保存装置のようなもの。文化を真に理解しないと、語学も上達しない。英語は『you』の三言しかないが、日本語には『あなた』『君』『お前』『お宅』『貴様』など、相手や場面によりいくつも呼び方があり使い方が異なる。文化を理解しなければ使い分けられない」と話す。

日本の大学でも学びなおし、日本語のカリキュラムで日本の教員免許を取得した。今は日本語が話せなくても教員免許

の取得ができるようになったが、当時は珍しかったという。

現在、高校で英語科主任のほかバレーボール部の顧問をしている。教えるのはプロだが、常に意識していることがある。それは「教えられる人の気持ちだ。これが分らず生徒に教えても、身に付いていかない。そのため、常に自らも学び続けている。プレー経験はなかったが社会人バレーボールチームでバレーを学び、放課後、生徒に教えた。語学でも新しい挑戦を続けている。今は、スコットランド・ゲール語を勉強している。「英語はSVO型、日本語はSOV型やろ。でもゲール語はVSO型なんやて」と楽しそうに笑う。

地元の神社でのインタビュー中、通りすがりの老夫婦とも「こんにちは。元氣そうやね」と、ごく自然に挨拶をかわす。「文化を理解する『すべてはここから始まる』」



子どもたちもスミスさんが大好き。

※主語（S）、動詞（V）、目的語（O）